

内容中心の言語活動を目指して

秋田南高等学校中部部 教諭 吉澤 孝幸

本稿では、学校設定科目「J.E. Communication」の実践を通して、内容中心の言語活動の在り方について考えてみたいと思います。「J.E. Communication」は、日本語や英語を通して様々な角度から生徒の言語能力の向上を図ることを目的として学校独自に設定した科目です。通常の英語授業であれば、教科書の配列に従って基本表現を練習した後、それらの知識等を活用して言語活動を行う場合が多いと思いますが、この学校設定科目では、①言語材料の提示・確認→②練習→③言語活動という流れにとらわれることなく、①最初から言語活動を行わせる（上手に転ばせる）→②必要な言語材料を整理する→③再度、同じ言語活動を行わせるなど、言語形式を習得してから言語活動を行うのではなく、言語活動をしながら形式に気付く機会を与えるということが思い切ることができる利点があります。

ここで、重視するのは伝えたい内容が流通するかという点です。例えば、夏休みの出来事を伝える場合、**I go shopping with my friends.** というように過去形を使えなくても、**go** という適切な動詞を使っていれば「B評価」（通過）という評価を与えます。ただし、「A評価」にはならないということを最後に伝えます。つまり、内容を踏まえて動詞の選択が適切にできることを目標の一つとした例です。その上で、最後に帰納的に文法事項を扱います。このような流れは、内容的アプローチ（Content-Based Instruction）と行うことができます。ある文法事項を全く指導していない段階でも、生徒の単語を全て拾って言い換え（リキヤスティング）てあげるなどの指導が可能になります。また、紙芝居を使った指導の際に、**will** を扱う場合も「**will** が先にありき」ではなく、「紙芝居のストーリーに沿って、登場人物の将来の予想ができるか」に焦点が当てられます。

今回の実践では、「ディベート」と名前が付いていますが、中1が対象ですので「**a kind of debate**」と授業の中で表現しました。ただ、上に述べたように生徒の単語レベルの発話を拾って足場をかけてあげるという手法は貫いて行うこととしました。まず、言語形式を身につけてからという考えもありますが、言語形式に集中している時はそこに意識が届くため一見身に付いたように見えますが、内容を伝えることを重視したような総合的活動になると当然意識が薄れます。その意識が届かなくなるような言語活動の中でこそ気付くことができれば身に付いたことになると思います。これは、正に「知識・技能」と「思考・判断・表現」は、縦に積み重なるものではなく、相互に行き来するものであるということの証であるように思えます。この学校設定科目では、以上のような考え方にに基づき実践を行いました。その指導案と生徒のメモ書きを再生した資料を通して概要をお伝えいたします。形式面を強化していくための工夫は、まだまだ不十分ですが、粘り強く解決していきたいと思っています。

(資料1)

中等部 第1学年3組 J.E. Communication 科学習指導案

日 時 平成28年10月28日(月)

授業者 吉澤 孝幸

場 所 中等部1年3組教室

1 単元名 「簡易ディベートに挑戦！」

2 単元の目標

- (1) 自分がつ国語や英語の知識を最大限に活用し、積極的にコミュニケーションを図ることができる。
- (2) テーマについて、日本語や英語で多様な角度からの自分の意見を構成・整理して表現できる。

3 生徒と単元

(1) 《生徒の実態》

男子17名，女子19名，計26名。

入学以前の学習経験の違いが平素の授業において大きな配慮事項になることはなく、ほぼ同じ段階から中学校における英語の学習をスタートした。言語活動においても、自分ができることを班や学級の中で貢献するという姿勢が見られ、協働的な学習を通して集団を高めていくことが期待できる。発表を通して交流する場では、やや声量に不安もあるが、個々の思考力は高く、日本語での討論では、話題とされる事柄に関する豊富な知識を基に、物事を批判的に考察したり、様々な角度から意見を出すことができる。また、日本語と英語の言語構造を比較する際に、国語で学習した漢文の語順と英語との共通性を引き出して説明するなどの場面が見られた。英語分野における活動では、話す際に簡単なメモを作成し話す準備をしているが、なぜメモ書きから話すのかという活動の趣旨についての理解も早い。伝える際にどのように話せばより効果的な伝え方になるか、また少ない語彙や表現を補うために、英語ではどのような視点からアプローチしたらよいかを意識して活動に取り組んでいるところである。

(2) 《本単元について》

本単元で設定している簡易ディベートを行うにあたっては、語彙も少なく使える英語表現も極めて限られているため、目標としている本格的なディベートを現時点で行うことは難しい。従って本単元は、将来本格的なディベートに取り組むことを見据えた「土台の土台」と形容することができる。それでは、「土台の土台」とは何か。本単元では、「英語で文が作れなくとも、今あるレベルで単語であっても積極的にコミュニケーションしようとする意欲」と規定したい。これは「英文が作れないので発話しない」という生徒を作らないことを意味する。「単語だけを発話したとしても、その単語を拾って先生が言い換えてくれる」という安心感も醸成したい。

本科目の最終的な目標は、「英語で討論やディベートができる」ことである。そこで大切にしていることは、「何とかして伝えようとする意欲」に支えられた伝え方であり、そのような姿勢自体がグローバルリーダーとして最も必要な資質と捉えている。語彙も表現も不足する中で敢えて最終到達点を簡易的に取り上げ、本科目が掲げる目標の基礎づくりの学習として生徒に伝えようとする意識の大切さを意識させたいと考え、本単元を設定した。

(3) 《(1), (2) を受けた, 本単元の指導について》

本科は, 最終目標を英語での活動に置いているが, 国語的分野と英語的分野を取り扱うことにあたり「日本語で行ったことを英語でそのまま置き換える活動は行わない。」ということ为前提とした。踏み込んで表現すると「日本語で考えたものを英語で書いたり, 話したりということとは行わない」と言える。その上で, 国語分野の役割を明確にして指導を行う必要があると考え, 国語分野では三つの役割を担うこととした。一つ目は, 日本語と英語の「論理構成」を十分に教えること。英語では, 「メインアイデア+理由・詳細・具体例・重み付け」などの構成となり, 日本語とのロジックパターンの違いを踏まえた上で発話することが大切になる。ここにこそ, 英語と日本語が組み合わせられている意義があると考え。二つ目は, 目標とする活動形式を体験させる。例えば, 簡易ディベートの流れや手順を国語で体験させ, 活動の流れを理解させる。その後で, 慣れ親しんだ段階で英語の活動を行う。最後は, テーマに関わりコンテンツを幅広く日本語で議論する。以上の三つを国語分野で扱い, その上で英語での活動に取り組むこととなるが, 日本語で議論したものの中から英語で行うことができる何割かを英語に乗せて表現させる。その際に, 日本語で行う時とは異なる角度から見方や考え方をもちたい。必ずしも文レベルの発話を強制せず, 文構造もネイティブにとって支障がないような文構造で許容する姿勢を示したい。

4 全体計画 (総時数 4 時間)

時間	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の指導のポイント	評価
第1時	<国語分野> 日本語の資料を読み自分の考えを深める。	テーマに関わり様々な考え方や見方を知る。	テーマと自分の生活体験を結び付けて考えることができるよう支援する。	ワークシート
第2時	<国語分野> テーマについて日本語で論理的な議論を行い, 活動の流れをつかむ。	活動の流れを知り, チームに分かれて簡易ディベートを行う。	相手の発話を踏まえて, 論理的な発言ができるように支援する。	観察
第3時	<英語分野> 自分の立場に基づいて, メモ書きを通して複数の理由を形成・整理できる。	教師とのやりとりを通して, 自分の生活場面と結び付けて理由となるキーワードを整理し, チームで共有する。	個人的な生活体験から考えることを理由付けの視点として与える。	ワークシート
第4時 (本時)	<英語分野> 英語と知識を総動員して整理・構成した考えを語句や単文で積極的に表現している。	ショートプレゼンテーションや簡易ディベートを行う。	生徒から出されるキーワードからどのような表現ができるか例を示したり, 言い換えを行う。	観察 後日映像による評価

5 本時の学習 (本時 4/4)

(1) ねらい

与えられたテーマについて, メモに基づいて意見を形成・整理し, 簡単な語句や単文で積極的に伝え合うことができる。

(2) 学習過程

段 階	生徒の学習活動	学習 形態	教師の指導	評 価 【観点】(評価方法)
導 入 (5分)	1 Presentations in groups どれだけ自分を語れるか	グル ープ	・プレゼンターの紹介とプレゼンテーション後の活動を簡潔に説明する。	
展 開 (43分)	2 Speech and Introduction “My mother often …”	全体	・生徒のスピーチを利用して本日のトピックへの布石とする。	
	3 Today’s Topic 生徒のスピーチを呼び水としてテーマを引き出す。		・話題と生徒の生活体験と結び付けるような即興的なフィードバックを行う。	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> “A parent comes in my room.” It’s OK. / I don’t like it. </div>			
	4 Simplified Debate			
	① Key Words Only <u>アイデアとなるキーワードをチームで出し合う。</u>	個	・文を書かないように注意を喚起する。	【関心・意欲】 文構造の間違いを恐れず、積極的に発話したり、応答している。 (活動の観察) (後日映像確認)
	② Sharing with the class 全体で共有し論理構成と発話例を示す。		・アイデアとしての単語を拾い英文で言い換えや確認をしてやる。	
	③ Simplified Debate on the team <u>4対4の簡易ディベートを行う。</u>	グル ープ	○2番目と4番目の生徒は、相手の意見に対応した意見を述べることを強調し、全体で確認する。	
	④ On the whole class 代表者簡易ディベート	全体	○生徒の発話を足がかりに、話題を発展させたり、優れたパフォーマンスに対する気付きを促す。	
終末 (2分)	5 振り返り方法を連絡する。	全体	言語の本質についての振り返りであることを伝える。	

(資料2) 視点：「自立」

■メイン

A parent shouldn't come in my room.

■サポート・詳細

not a child

my plan, my space, and my idea

training, necessary

■まとめ

So I don't like it.

That's my idea.

視点：「一人の時間」

■メイン

A parent shouldn't come in my room.

■サポート・詳細

my time important

write daily note

for me not for mother

■まとめ

So I don't like it.

That's my idea.